

第35回 抗コリン薬

自律神経は交感神経と副交感神経の二つに分けることができます。そのうち、交感神経の働きを伝える物質がノルアドレナリン（ノルエピネフリン）であり、副交感神経を伝える物質がアセチルコリンです。副交感神経は身体の様々なところに影響を及ぼすため、効果も様々な物があります。それでは、採用されている抗コリン作用が主なくすりについてみていきましょう。

ブスコパン：化学名の N-butylscopolamine に由来
消化管の動きを止める作用があるため、鎮痙剤として使われ、胃炎などによる痙攣や運動機能亢進による症状を緩和する目的で使われます。

スピリーバ：「Spiriva」は“バイタリティ、エネルギー、インスピレーション”を想起させるスピリット (spirit) に由来している。また「spiriva」の「spir」は肺機能検査を意味するスパイロメトリー (Spirometry) を連想させ、肺機能にも関連付けている。

慢性閉塞性肺疾患に対する吸入薬です。喘息では、交感神経系の薬が主に使われますが、COPD では、抗コリンの吸入薬が第一選択として推奨されています。

アキネトン：Akinetic 運動不能の + tone 身体・精神の正常な状態→運動不能の状態を正常にする

アーテン：症状、疾患に対して治療を意味する接頭語の anti をもじった ar に痙攣性緊張、強縮を意味する tetanus を合成し振せん麻痺を特徴とするパーキンソン症候群の治療薬という概念を表した。

どちらも、パーキンソンの薬ですが、パーキンソン病は脳内でアセチルコリンの増加とドーパミンの減少が起こり、バランスが崩れたため、運動機能障害が起こります。この治療に、アセチルコリンの影響を減らす、抗コリン薬が古くから使われています。

ベシケア：Vesica (膀胱) を care (保護) する

ポラキス：Pollakisuria (頻尿) より

副交感神経は膀胱を収縮させる作用があります。このため、膀胱への働きが過敏になると、頻尿や失禁などを起こします。これを抗コリン薬で抑えて治療を行います。

ミドリン P：mydriasis (散瞳) と phenylephrine (主成分であるフェニレフリン) の P から命名

副交感神経は目の瞳孔を開く作用があります。主に、瞳孔を開くことで検査や処置として使われることが多い薬です。

このように、抗コリン薬は幅広い効果を持って使用されています。くすりでは、幅広い効果があるということと、対になってついてくるのが副作用の問題です。

今回は、抗コリンの副作用についてです。